

# 『源氏物語』における「武蔵野」についての考察

## —歌語「むさしの」の機能するもの—

### A Study of the Term “Musashino” in *The Tale of Genji*

足立 雍子

ADACHI Yasuko

An entry in Lady Murasaki Shikibu's diary from November 1, 1008 (Year 5 of the Kanko Era), in which she is jokingly addressed as “Wakamurasaki” by poet and court bureaucrat Fujiwara no Kinto, confirms that *The Tale of Genji* was indeed written by her almost exactly 1000 years ago.

On the millennium of that remarkable literary achievement—the tale is said by some to be the world's first novel—it is fitting to offer some thoughts on the term “Musashino,” which is not merely a place name laden with meaning in Japanese poetry but also revealing of the author's various intentions and hidden messages.

Superficially, “Musashino” refers to the relatively featureless plain that makes up what is now the Greater Tokyo Area and the lovely grasses that grew there, but our research into the poems of the early Heian Era (794-1185) indicates that these images are also indicative of Lady Murasaki's opinions and political agenda. In this paper, we show her usage of the term “Musashino” in the *The Tale of Genji* and how it reveals her underlying messages.

はじめに

本年2008年は『源氏物語』が執筆されてからちょうど、千年紀にあたる。しかし厳密に、言くと作者紫式部の生没年月日も定かではないし、源氏物語が制作された年もはっきりと限定できるものではない。当時の書物は写本の形体を取り作者も勿論明示することも無い。ただ『紫式

部日記』の寛弘五年十一月一日の段、中宮彰子の長子（敦成親王、後一条天皇）五十日の祝いの席で左衛門督、藤原公任に「あなかしこ このわたりにわかむらさきやさぶらふ」（下線筆者・以下同じ）と声を掛けられたとの記述があり、現代の我々はその記載事項のみによって、この段階で「若紫」の巻が既に流布していて、時の有職故事に通じ文化人として名高い公任から、作者であるとの承認を得ていることを確認できる。本稿はその源氏物語でもとりわけ注目を浴びる「若紫」の語句から、その「紫」を引き出すことになる歌語「武蔵野」に更に目を移し、なぜ「武蔵野」なのかを考えてみた。また筆者としてもその「武蔵野」の面影の残る狭山丘陵地帯を訪れることが重なり、物語と現在の風景とを重ねて見ると王朝人が遠く離れた「武蔵野」についてどのような考えや、イメージを抱いていたのか想像に難くないことを知った。したがって本稿では源氏物語に記載される「武蔵野」を紫式部が、どのような意図のもとに用いたかを考察したい。紫式部時代とそれ以前に創作された和歌、物語より「武蔵野」関連を引き出し、考察の結果、歌語のイメージからもたらされる世界観と同時にその根底には、時の権力に対する政治性をも読み取ることができるとの結論に達した。

今回の論考を呈するに当たり特に以下の先行研究に触発されたことを述べたい。

1) 紫式部学会 2007年12月 『「源氏物語」と東国』多田一臣（東京大学）

東国を「都」と「鄙」との対立構造から外れて第三の地域ととらえ、都人が東国に持つ一定のイメージについての考察を行っている。

梗概をのべると、都人にとって『万葉集』の「東歌」などから既にステレオタイプとしての東国像が出来上がっていた。『源氏物語』中、「浮舟」は東国の女として登場するが、『源氏物語』では珍しく官能的世界が描かれており、多田一臣は「浮舟」が人妻であり、催馬楽「東屋」を引き、東国に一種のエキゾチシズムを都人は持っていた、と説いている。また『万葉集』「珠名娘子」「高橋虫麻呂」の反歌、

「金門にし人の来立てば夜中にも身はたな知らず出でてそ逢ひける」（万葉集九卷一七三九番）  
（門口に男が立つとたとえ夜中であつてもわが身を顧みることなく出ては逢ったということだ。）  
を一例に引き、長歌にひきつづき反歌でも「珠名娘子」の自由奔放な性愛を歌っており、その他「東歌」には多くのおおらかな男女の愛情表現が見出される。それらは筑波山の歌垣の風習とともに、王朝人には一種独特な造形的イメージを与えていた。すなわち東国とは遠く離れた都人にとっては植地的な異界として扱われていたとの見解を示している。

2) 和歌文学会 2008年 7月『「源氏物語」の和歌と引歌』 清水婦久子(帝塚山大学)

「若紫」から「藤袴」への関連性をその時代の歌から作者紫式部の意図として読み解かれた。「若草」「初草」などの語句が『伊勢物語』第一段、四一段から派生し「紫」を引き出し、それと関連して「草」「ゆかり」「露」などと詠み込まれる当時の歌から紫式部には「若紫」の女君は紫のゆかりとして、それに「藤袴」の女君「玉鬘」を登場させる際のもう一つのゆかりとして印象づける意図があったと述べている。

紫のゆかりをテーマとする「若紫」の巻は、『古今集』、『伊勢物語』のみならず、平安初期の歌を踏まえているが、「藤袴」も天徳年間に新しい意味が加わった歌語「藤袴」によって作られたとの説である。

おひ立たむありかも知らむ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき (若紫巻)

初草のおひゆく末も知らむ間にいかでか露の消えんとすらむ (若紫巻)

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず (『伊勢物語』 第一段)

紫のひととゆえに武蔵野の草はみながらあはれとぞおもふ(『古今集』雑上八六七読人知らず)

武蔵野の草のゆかりに藤袴若紫にそめてにほへる (『元真集』七十) 天徳三年斎宮女御前裁合

以上の歌語から関連して一種の歌の世界とイメージが出来上がっており、そこには懐かしいゆかりの紫から藤袴へと展開していくことを示した。

両者の説を踏まえて更に筆者は、今回のテーマである歌語「武蔵野」に着目したいと思う。

まず多田の論に触発され東国のイメージを再考してみた。現在の東国一帯を多田の説くイメージでひとくくり出来るであろうか、という疑問が湧いた。東国のなかでも「武蔵野」には別のイメージ的世界があるのではないか。東国には自由な男女の愛を歌う世界もあるが、「武蔵野」は『源氏物語』のなかでは「紫」「ゆかり」「草」「露」「根」などの歌語を引き出している。そして『源氏物語』の根幹をなす二人の女主人公の登場場面のある「若紫」巻でなぜ源氏は「武蔵野」といえばかたれぬと、下記の歌の一部を引いたのか。

「しらねども武蔵野といへばかこたれねよしやさこそは紫のゆえ」(『古今六帖』五 三五〇七) そこには作者紫式部のどのような意図があったのか考察していきたい。

清水婦久子による巻名研究から、歌語はその背景に当時の和歌的世界があるのであり、新しい意味を持つ過程を読み取れたように思う。

本稿では方法としては紫式部生存以前の物語、主に『伊勢物語』『大和物語』また勅撰和歌集

私家集などから「武蔵野」語句を選んで、比較検討を試みる。

論考の結果筆者は作者紫式部の周到までの緻密な計算と政治的意向を汲み取ることができた。それは権力の真っ只中で執筆した不屈な物書きとしての精神構造であった。以下試論を呈したい。

## 1. 『源氏物語』における「武蔵野」

『源氏物語』のなかで「武蔵野」という語句が表記されているのは2箇所である。まず「若紫」の巻で幼い紫の上が手習いをする場面と、もう一つは「常夏」の巻で近江の君が弘徽殿の女御に文を奉る場面である。以下に引用する。

### 1) 「若紫」

下記引用、小学館日本古典全集『源氏物語』1 333 7、10-334 4

君は、二三日内裏へも参りたまはで、この人をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本にと思すにや、手習、絵などさまさまにかきつつ見せたてまつりたまふ。いみじうをかしげにかき集めたまへり。「武蔵野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書いたまへる、墨つきのいとことなるを取りて見いたまへり。すこし小さくて、

源氏　ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりをとあり。「いで君もかきたまへ」とあれば、「まだようは書かず」とて、見上げたまへるが、何心なくうつくしげなれば、うちほほ笑みて、「よからねど、むげに書かぬこそわろけれ。教え聞こえむかし」とのたまへば、うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへる様の幼げなるも、ろうたうのみおぼゆれば、心ながらあやしと思す。「書きそこないつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば、

紫の君　かこつべきゆえを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらんと、いと若けれど、生ひ先見えて、ふくよかに書いたまへり。

北山で見出した少女「若紫の君」はなかば強引に源氏のもとに引き取られ愛育される。実はこの少女は源氏が密かに思慕する藤壺の宮の姪にあたるのだが、父桐壺帝の愛妃である藤壺をへの叶わぬ恋情から、源氏はゆかりの姫君を膝下に置き、自分の理想の女性に育てあげる。この若紫

の君が後の紫の上となり、源氏物語の根底をなす女主人公となってゆく。

強引に二条院に引き取った姫君を源氏は内裏にも出仕せず、手習、楽器を教えて日々を過ごす。

その手習いの一場面、手習いの手本として源氏は紫色の紙に古歌を書く。

「武蔵野といへばかこたれぬ」は下記『古今六帖』の一首を引き歌としている。

「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆえ」(『古今六帖』五 三五〇七)  
(知らぬ土地ながら武蔵野と言うとしぜん恨み言を言ってしまう、それというものなつかしい  
紫草のせいだ。)

紫の紙に源氏は歌を書く。そこで紫の君は恥らいながらも返歌をする。『いかなる草のゆかりな  
のかわかりません』幼い紫の君は古歌が引き歌であることをわきまえて応える。それは源氏のテ  
ストに答えたことになる。

またその他下記の『古今集』雑上読み人知らずの歌も重複したイメージが背後にあったろう。

紫のひともとゆえに武蔵野の草は見ながらあはれとぞ思ふ (『古今集』 八七六)

したがってこの場では古歌を踏まえ「武蔵野」の語句が喚起するのは「紫」「ゆかり」「根」  
「寝」「草」「ゆえ」となる。ここに血縁のゆかりという意味が浮かび上がってくる。作者紫式部  
は『古今六帖』の古歌、またその他の歌を踏まえその和歌的な世界でイメージを膨らませ読みを  
より重層的なものにしていると言える。

## 2) 「常夏」

もう一つは「常夏」の巻にやはり「武蔵野」という語句が、以下のように見出される。下記引  
用、小学館日本古典文学大系『源氏物語』3 240、6

「知らねども武蔵野と言へばかしこけれども、あなかしこや、あなかしこや。」

内大臣邸に引き取られた「近江の君」は、異母姉の弘徽殿の女御に早速、文を奉るが、その時  
さがな者と笑われながらも、精一杯の知識を振り絞り、古歌をふまえた文を考えるのである。『源  
氏物語』では喜劇的な人物として造形される近江の君であるけれど、彼女でさえもこの古歌は周  
知のことなのである。当時の知識人でなくともある一定の人々には「武蔵野」という語句で直ぐ

に上記の古歌は思い当たったであろう。そのような目には見えないが、共通の精神的基盤の確立の上にこの物語が享受されていたのは当然であろう。

いずれも「知らねども武蔵野といへば」を引き歌とし「ゆかり」「血縁」を導く語として用いられていることは明らかである。

しかし単にそれだけのイメージであろうか、紫式部の頭脳の緻密さは今更述べるものでもないが筆者はこの背後に重層的な意味を読むことができると思う。それらは王権と摂関政治への当時の関わりまで展開していくのは深読みであろうか。

## 2. 歌集における「武蔵野」

### 1) 『万葉集』に見る「武蔵野」

なお、下記（ ）内は小学館日本古典文学大系『万葉集』巻、番号、下線筆者

<u>武蔵野</u> に占へ象焼きまさでにも告らぬ君が名占に出にけり	(一四 三三七四)
<u>武蔵野</u> のをぐきが雉立ち別れ去にし夕よ背ろに逢はなふよ	(一四 三三七五)
恋しければ袖も振らむを <u>武蔵野</u> のうけらが花の色に出づなめ	(一四 三三七六)
<u>武蔵野</u> の草は諸向きかもかくも君がまにまに我は寄りにしを	(一四 三三七七)
わが背子をあとかも言はむ <u>武蔵野</u> のうけらが花の時なきものを	(一四 三三七九)

以上『万葉集』には「武蔵野」の語句関連として、窪地に雉がおり野にはおけらの花や諸向の花などが咲き、素直な恋情とともに表現されていて、先にあげた東国をイメージする性愛、異風的な歌の世界は表出していない。「武蔵野」との関連において紫草は歌いこまれていないのである。

次に『万葉集』から 紫、紫草の歌語が用いられている歌を摘出すると十五首見出される。

あかねさす <u>紫</u> 野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る	(一 二十)
<u>紫草</u> のにほえる妹を憎くあらば人妻故に我恋ひめやも	(一 二一)
託馬野に生ふる <u>紫草</u> 衣に染めいまだ着かずして色に出でにけり	(三 三九五)
<u>紫</u> の名高の浦の真砂土袖のみ触れて寝ずかなりなむ	(七 一三九二)
<u>紫</u> の糸をそ我が縊るあしひきの山橋を貫かむと思ひて	(七 一三四〇)

紫の名高の浦のなのりその磯になびかむ時待つ我を	(七 一三九六)
紫草の根延ふ横野の春野には君を懸けつつ鶯鳴くも	(十 一八二五)
紫の名高の浦のなびき藻の心は妹に寄りにしものを	(十一 二七八〇)
紫の帯の結びも解きもみずもとなや妹に恋ひわたりなむ	(十二 二九七四)
紫の我下紐の色に出でず恋ひかも瘦せむ逢ふし世しをなみ	(十二 二九七六)
紫のまだらかづら花やかに今日見し人に後恋ひむかも	(十二 二九九三)
紫草を草と別く別く伏す鹿の野は異にして心は同じ	(十二 三〇九九)
紫は灰さすものぞ海石榴市の八十の街に逢へる子や誰れ	(十二 三一〇一)
紫草は根をかも終ふる人の子のうら愛しけを寝を終へなくに	(十四 三五〇〇)
紫の粉漉の海に潜く鳥玉潜き出ば我が玉にせむ。	(十六 三八七〇)

これら十五首を見ても紫、紫草は「武蔵野」とは関連づけられていない。『万葉集』の時代には紫、紫草が後世のような血縁のイメージはまだ無い。

しかしその中でも注目すべきは、二十、二十一、有名な天武天皇と額田王との蒲生野での贈答歌であろう。大海人皇子（天武天皇）の妃であった額田王はやむを得ず兄の天智天皇の妃ともなる。兄により引き裂かれた二人は後年、蒲生野で遊猟の際再会する。「紫草の生える野をあなたは私に向かって袖を振っている。野の番人が見ているのではないでしようか」と額田王は大海人皇子（天武天皇）に歌いかける。「標野の紫草のあなた、今まさに輝くあなたを憎かろうはずがなく人妻だからこそ恋しく思うのですよ」と返歌する。紫草の生える標野（禁野）は王家の所有する原野であり、狩猟の遊びなどが行われていた。むろん一般には開放されていない。禁野、人妻、紫草などのイメージはこの歌にも既に見られる。

以上のように『万葉集』代では「武蔵野」が「紫」「ゆかり」と結び付けられ歌われることは無かった。しかし、ただ上記二首は、紫が禁忌、タブーなどの関連語とのイメージを持っているということは言えると思う。

## 2) 勅撰集における「武蔵野」

では次に平安時代（紫式部以前、同時代）の歌における「武蔵野」関連の語句を探してみる。

なお、下記（ ）内は『新編国歌大観』番号である。

### ①『古今集』

紫のひととゆえにむさしのの草はみながらあはれとぞ見る (八七六 読み人知らず)

秋風のふきふきぬけるむさしのはなべて草ばの色かはりけり (八二一 読み人知らず)

② 『後撰集』

武蔵野は袖ひつばかりわけしかどわか紫にたづねわびにき (一一七七 読み人知らず)

をみなえしにほへる秋の武蔵野は常よりも猶むつまじきかな (三三七 貫之)

③ 『拾遺集』

紫の色にはさくなむさしのの草のゆかりと人もこそ見れ (三六〇 如覚法師)

3) 『古今六帖』における「武蔵野」

なお下記( )内は『新編国歌大観』番号

しらねどもむさしのといえばかこたれぬよしやさこそはむらさきのゆえ (三五〇七)

紫のひととゆえにむさしののくさはなべてもなつかしきかな (三五〇〇)

むさしののくさばもそむきともかくも君がまにまにわればよりにき (一二六三)

春はまずあづま路よりも若草のことめはつてよむさしののかぜ (三八四 元方)

秋風のふき吹きぬるむさし野はなべて草木の色かわりけり (一一五二 伊勢)

しぶたにのふた神山にわしぞこむてふむさしのはにもきみがためにわしぞこうむてふ

(一一七二)

平安時代初期になると貫之、小町の歌のように「武蔵野」はむつまじいという歌語と関連しており、また、伊勢の草木なども歌いこまれるようになる。『古今集』、その他歌集の周辺で「武蔵野」は草、ゆかり、紫との関連で詠まれるようになったと言えよう。

4) 私家集にみる「武蔵野」

なお下記、作者番号、( )内は『新編国歌大観』番号を示す。

① 『能宣集』 33

むさしのにいかでかこまし秋ざりのひまなくたてるのべにやどりて (四七八)

あづまちにありとききこしむさしのをけふともきりのたちかくすらんふたらの山 (三三九)

むさしののつづきのこほりつづきつつおのおのちよをおもふべらなり (三三六)



- むさしののむかしのはぎをうつしえ君がためとぞこの秋はまつ (三八四)
- ② 『小町集』 5  
 むさしのにおふとしきけばむらさきのその色ならぬ草もむつまし (八三)  
 むさしののむかひの岡の草なればねを尋ねてもあはれとぞ思ふ (八五)
- ③ 『兼輔集』 14  
 紫の一本ぎくはよろずよを武蔵野にこそ頼むべらなり (五八)
- ④ 『義孝集』 52  
 紫のいろにはさくなむむさしのの草のゆかりを人もこそみれ (二六)
- ⑤ 『元真集』 28  
武蔵野のくさのゆかりにふぢばかまわかむらさきにそめてにほへる (七十)
- ⑥ 『長能集』 69  
むさし野の草のゆかりをたづねみばつかひをしもはなどかまつべき (一二六)  
 わかるらんとまるもおなじむさし野の木の下露はかぜもふきあへず (一二八)
- ⑦ 『伊勢集』 15  
むさしののくさばにやどるしらつゆのいくよあるべき我ならなくに (四二〇)
- ⑧ 『忠見集』 23  
 ゆきくらすたびのやどりもむさしののくさむすぶよはおもはしきかな (一二)
- ⑨ 『順集』 29  
武蔵野のこまむかへにや関山のかひよりこえて今朝はきつらん (二三三)
- ⑩ 『九条右集』 44  
むさしのの野なかを分けてつみそめしわかむらさきの色はかはりき (五)  
 かれぬべきくさのゆかりをたたじとてあとをたづねと人はしらずや (三九)  
 つゆじものうへともわかじむさしののわれはゆかりのくさばならねば (四十)
- ⑪ 『実方集』 67  
 かこつべき人もなきよにむさしののわかむらさきをなににみすらむ (一六九)  
 したにのみなげくをしらでむらさきのねずりのころもむつましきゆえ (一七〇)
- ⑫ 『兼盛集』 32  
武蔵野を霧の晴れ間に見わたせばゆきさきとほき心こそすれ (六三)
- ⑬ 『道信集』 61  
むらさきのね見ぬものゆえむさしのをたづねしほどにすえばくちにき (五十)

以上私家集における「武蔵野」の歌語が読み込まれている歌を拾った。それにより「武蔵野」と関連してやはり「草のゆかり」「紫」「根」「尋ねる」「むつまじ」「人」などが多く詠み込まれていることがわかる。また同時に、秋風、秋の草木、菊や萩、露、霧なども一方では「武蔵野」から想起されている。

そこで私家集の作者の経歴を見てみると、系図的に興味のある事実が浮かび上がってくる。それは藤原師輔を祖とする九条家の作者に多く「武蔵野」の関連語句が詠まれている点である。九条家、藤原師輔は右大臣であったことからその私家集名は「九条右集」である。

師輔は、藤原冬嗣より四代後の人で、冬嗣―基経―忠平―師輔と子孫を広げ摂関政治の中心人物を出している家系に属する。師輔の子には兼家、そしてその子に道長がいる。

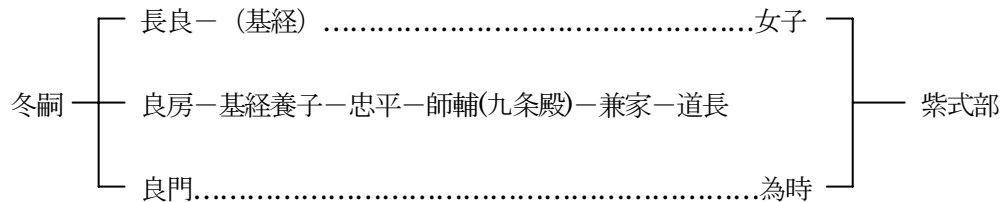
上記私家集の作者の中で実方は師輔の甥であり義孝、長能、道信は皆、師輔の孫に当たる。したがって師輔周辺、九条家を祖としてその周辺から子孫までに「武蔵野」に喚起される歌語では圧倒的に「草のゆかり」「紫」「根」「尋ね」の語句が多い。それらは政治の周辺にいた作者の家と王権のつながりをも暗示するイメージであったと言えるのではないか。王権との結びつきにより摂関政治を施してきた九条家にとっては「ゆかり」を「尋ね」ることは一家、一族の繁栄を担った特別なことばであったと言えるであろう。

藤原氏でも特に九条家が、王統と血を結びつけることにより政権を担ってきたからこそ、これらの歌に読み込まれる紫草のゆかりへの思いは重い。ちなみに紫は禁色でもあり、もっとも高貴な色であり、王統とも結び付けられる色である。師輔は村上帝の後宮に長女安子を入内させる。安子が女御から中宮となっところから九条家の栄光は始まった。安子は後の冷泉天皇、円融天皇を儲ける。二人の天皇の外祖父として九条家は栄えていった。更に師輔の子兼家は時姫との娘、詮子を円融帝に入内させ、一条帝を得ている。そしてさらに、この一条帝に入内して後、中宮となり、後一条帝の母となるのが道長の娘彰子であった。天皇の外祖父として権力を掌握する摂関政治の構造には、まさに王統との血のつながりが全ての根幹にある。「ゆかり」と言う「なつかしい」、「分けてさがす」という一見やさしい雰囲気醸し出す歌語には、もっと濃密な意味があった。

それらに反して九条流以外の歌では「武蔵野」に喚起される語句として「秋」「霧」「露」などが多く、これらのイメージはまた別に秋の「武蔵野」の風景を作っていくことになる。荒涼とした原野に秋草が茂り、月が傾く意匠は琳派の画材となるのである。

ところで紫式部の時代は九条流の歌が周知のこととなり、遍く伝播していたと思われるが、紫

式部自身はどのように「武蔵野」をイメージしていたか、また九条流の歌についてどのような考察をしていたのか。



藤原氏は閑院左大臣冬嗣から長良、良房、良門と分かれるのだが、栄光の道を歩むのは良房から、基経、その後の忠平、そして師輔の九条家にのみになってしまう。長良、良門の子孫は五位の受領階級に落ちてしまい、紫式部の父親にあたる為時も、越前守に任命されるほどの階級であり、夫宣孝は地方歴任の受領階級であった。しかし筆者は系図を見ているうちにあることに気付いた。繁栄をもたらした藤原師輔の祖、基経は実は良房の養子であり、実父は長良であるということだ。この長良の子孫である女子と良門の子孫の藤原為時との間に出来た女子が紫式部である。

ということは、基経の血脈は紫式部のほうにこそ流れているという事実である。紫式部は藤原北家（冬嗣の系）の長子、長良の実の血は我が家のほうであるという誇りが内心あったのかもしれない。紫式部の父為時、夫の宣孝も、式部の時代には国守を歴任しているものの位は正五位下にあった。長良、良門の子孫も既にこの頃には国守の四位下から五位になっている。一方、良房の子孫のみその後、基経（摂政関白太政大臣）、忠平（摂政関白太政大臣）、師輔（右大臣）、兼家（摂政関白太政大臣）、道長（摂政関白太政大臣）という具合に、時の権力を掌握して、藤原家九条流の全盛期を迎えていた。その道長の天下で紫式部には内心忸怩としたものがあつたろう。一方、式部の曾祖父、堤中納言兼輔が、三十六歌仙の一人であり、歌人文芸の血筋であつたことも式部の大きな誇りであつたと思う。我が世を謳歌する道長の下で、紫式部は内に燃える密かな反骨精神を物書きで満たしていたと解釈できないであろうか。

### 3. 『大和物語』と『伊勢物語』における「武蔵野」

次に前時代の物語から「武蔵野」の語句を拾った。

1) 『大和物語』

三二段 武蔵野の草

「亭子の帝に右京の大夫のよみて奉りたりける

あはれてふ人もあるべくむさし野の草とだにこそ生ふべかりけれ」

同じような歌が、『続後撰集』にもある。

詞書 亭子院に奉りける 監命婦

(続後撰集卷十三 恋三)

あはれてふ人もあるとむさし野の草とだにこそなるべかりけれ

本来は監命婦の恋の歌であったものが『大和物語』では、ひねられて宇多天皇に目をかけられ、地位を上げて欲しいという非常に政治的な意味合いを含む歌となっている。物語は天皇に官位昇進の意を暗示したが通じなかった話になっている。これも「むさし野」とそこに生えている「草」にかけた歌であり、恋歌から政治的な意を含めた歌となっている。

2) 『伊勢物語』

『伊勢物語』では多くの「武蔵野」関連の段を見ることが出来る。

一段 初冠

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思はず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫掬の狩衣をなむ着たりける。

春日野のわかむらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず  
となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ  
みちのくのしのぶもちずりたれゆえに乱れそめにしわれならなくに  
といふ歌の心ばへなり。昔人はかくいちはやきみやびをなむしける。

まず一段、在原業平とおぼしき人物が元服し意気ようようと奈良の地に狩にでかけたところ、思わず美しい姉妹を物陰から見ることになる。早速その若い男は色好みを触発し、歌を詠みかけるが、若紫は若々しい紫草、その根からとれる染料の紫色で摺った衣の模様のように私の心は乱

れておりますと、河原の左大臣、源融の歌を引き歌いかけている。この物語初段にふさわしい輝かしい青春を謳歌する貴公子の歌ではある。

しかし、この男は「身をえうなきものに思ひなして京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり」と九段にあるように東下りになる。物語では三河の国、駿河の国を通り、富士山を見て「なほゆきゆきて武蔵の国と下つ総国とのなかにいと大きな河あり」と、京からはるばると来て大きな河の前でいよいよ心細さが増していくことになる。その時船頭が「はや船に乗れ、日も暮れぬ」と一行をせかす。ちょうど、その時くちばしの赤い白い鳥が飛んでいるので船頭に尋ねると、船頭は「これなむ都鳥」と言う。それを聞いて歌った歌が下記のものである。

名にしおはばいざこと問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

(小学館日本古典文学大系『伊勢物語』142 11-13)

京での或る事件をきっかけに、都に住めなくなった男は、東の地へと下ることになる。貴子流離である。歌は都人の地方に対する優位がうかがえる。物語と実際とは即同じことではないが、ここでは王孫である主人公は遠い地への流離の悲哀と傲慢さを示している。

#### 十段 たのむの雁

むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける。父はなほ人にて母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。このむこがねによみておこせたりける。すむ所なむ入間の郡、みよしのの里なりける。

みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる  
むこがね、返し、  
わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ

武蔵野国の入間まで来た男は都人、貴人と見られ土地の娘と逢うことになるのだが、母親は藤原氏の流れを汲むために、娘の婿には都人を選びたいという意思がある。しかし、この男はその母親の代詠の求婚の歌を軽くいなしている感がある。地方で土地の男と結ばれ、土着してしまった藤原氏の末裔の母親に対して、都人としての優位がうかがえる歌なのである。

東下りの男の憂鬱と都人としての矜持、優位性を「武蔵野」の土地へと反映させている。これ

らの段での「武蔵野」では、王統の血に対しては、たとえ藤原氏の末裔でも及ばないことを示している。

『源氏物語』「常夏」の巻、内大臣家に引き取られた近江の君は、異母姉、弘徽殿の女御に「武蔵野」という歌を引いて血縁を強調した。それはこの『伊勢物語』に登場する野に下った藤原氏の末裔の母親と同じであろう。藤原一家に血縁ある者という意味で「武蔵野」を引用しているが、その藤原氏として物語の中でも王統との血縁関係を結ぶべく弘徽都殿の女御を入内させているのである。王統の血の優位性を述べている。

#### 十二段 盗人

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、ぬすびとなりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかに置きて、逃げにけり。道来る人、「この野はぬすびとあなり」とて火つけむとす。女わびて、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり  
とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

古代の武蔵野では焼畑が行われていたらしい。薄や灌木を焼いて灰の中に種をまき、翌年には別の野を焼き繰り返すと、数年でまた灌木が茂ってきた。

上の歌は『古今集』春上読み人知らずの古歌であり、初句が春日野である。もとは春の野遊びの伝承歌でもあったのが、『伊勢物語』ではその一部をとっている。この歌では若草の妻を盗み、武蔵野国で暮らす二人に追っ手が忍び寄るとき、その緊張感に若草の妻は必死で歌いかけるけれど二人は捕らえられてしまう。この男が女を盗み逃亡するという話型は、六段の芥河と通じるところがあるので、以下長いけれど一部引用する。

#### 六段 芥河

むかし、男ありけり、女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに来けり。芥河という河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、『かれは何ぞ』となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、やなぐいを負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつついたりけるに鬼はや一口に食ひてけり。『あなや』といひけれど、神鳴るさわざに、え聞かざりけり。やうやう

夜も明け行くに、見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものを

『伊勢物語』の有名な芥河の段である。深夜男は高貴な女性を背に負い盗み出す。途中女は背の上で道辺の草の上の夜露がきらきら輝くのを見て珍しいのか「あれはなに」と男に問う。男は逃走中なので背の女に答えず、ひたすら駆ける。ところが、雷と雨が激しくなり、行先を閉ざすので、近くの小屋に女を匿って自らは戸口で番をしていた。ところが、その間に鬼が現れて女を一口で食べてしまう。男は地団太を踏んで悔しがり、泣くがどうしようもない。

それなら「あの光るものはなに」と尋ねられたとき、露と答えて一緒に消えてしまえばよかった、と嘆く。この話は高貴な女性を連れ出したり、または交渉を持つことにより、都を追われて地方をさまようという伝承的話型である。禁忌、タブー犯しのテーマが語られている。

業平自身とは即断言できないものの、藤原長良の娘高子がまだ清和天皇のもとに入内する前の話と説明されている。高子はその後、陽成天皇を生む。男は女を連れ出す事が叶わずそのため東下りになるというストーリーである。

高貴な女性を盗み、連れ出すという、話型はそのまま『源氏物語』「若紫」の巻に相似する。藤壺の姪の若紫は後見役の祖母も亡くなり、いよいよ父親の兵部卿宮邸に引き取られることになる。その寸前、源氏は紫の君を略奪のようにして自邸二条院へ連れ出す。この場合若紫は親王の娘であり女王になるので、やはり皇孫、高貴な血筋の女性ということになる。

『伊勢物語』での「武蔵野」は都人から見るとあくまでも地方であり、都人の優位性がうかがえるが、また貴人の東下りの地であることから、そこには何か雅趣と禁忌を犯して辿り着くところとしての物語イメージが定着していると言える。摂関家の野望を体当たりで砕く男の像として読めば、これも極めて政治的である。禁色である紫色の染料となる紫草、それが生えるといわれる「武蔵野」は、懐かしい草原であると同時に、九条家は血縁による摂関家と王統のゆかりと詠んできた。しかし『伊勢物語』では王孫とおぼしき男が、都から摂関家の娘を盗み取り、「武蔵野」まで逃げてくる。摂関家に対しての王孫の挑発であり、意地でもあったといえる。そして「武蔵野」というのは、次項で述べる王孫と関わりの深い土地であるから、とも言える。

「武蔵野」の語句が草のゆかりを引き出し、歌う側に即してその意図を探ってきたが、摂関家との意図を逆手に取り、『伊勢物語』に見られるように、実はそこには王孫のゆかりがあったことを次に探してみたい。

#### 4. 「武蔵野」の歴史

「武蔵野国」は現在の東京都、埼玉の全域、神奈川県の一部、つまり関東平野西部の武蔵野台地を指すが、広くは関東原野を指す。上代は「むざし」と発音したか、大宝元年（701）大宝律令制定時「武蔵野国」は東山道の一国であった。（国府は現府中市）その後、宝亀2年（771）東海道へ所属替えになり、畿内よりの距離が短縮される。

推古朝（593）聖徳太子が摂政となるが、皇子であった頃、上宮王家の乳部（みぶ、皇子養育に奉仕した部、直轄地）があった。

その後天長6年（829）空閑地290町を西院勅旨田、承和元年（834）荒田地を冷泉院の勅旨田、承和8年（841）田123町、嵯峨院の勅旨田として開墾される。こうして、中央王朝の屯倉ができるのである。『武蔵野国』大宝令の等級は大国、遠国、郡数21郡とある。『延喜式』（967施行）民部には紫草の交易国の一つとなっている。甲斐、相模、武蔵野、下総、常陸、信濃、上野、下野、出雲、石見、大宰府、などの国々が紫草の産地として挙げられている。

紫草とはムラサキ科ムラサキ属の多年草で、6～7月に丘の草地に白い花を咲かせる。高さは40～70センチ程度までに成長し、根が太く紫色の染料に利用される。紫の染料は紅花と同様に、大変高価なもので、その根を搾り出して染める紫色は高貴な色であって、使用は限られていた。距離的に見ると遠い国とされる、「武蔵野国」であるが中央にとっては王家の屯倉があり、そこに根ざす紫草は、珍重すべき、又いとおしむべき草であるので、草を分けて探す価値のあるものであった。

したがって本来の問題に戻るが、紫式部が歌語の「武蔵野」を引き、源氏が紫の君とそのゆかり藤壺宮への思いを歌に重ねたことは、今まで読んできたとおりである。更にその歌が繁栄を極める九条家の私集に多く詠まれている理由は撰家と王家のゆかり、絆を求めていることとも取れた。しかし紫式部は更にひねりをここでいれていると本稿では結論付ける。

つまり「武蔵野国」は、中央王家の上代から関わりの深い土地柄であり、その草を分けて探すいという紫草こそ王家のつながりを表すものである。すなわち、それは藤壺宮なのであり、紫の君なのである。紫式部は一条帝して「この人は日本紀をこそ読みたまふべけれ。まことに才有るべし」と言わせている人物である。漢学から日本紀まで読み通しており、「武蔵野国」についての見識も持っていたと思われる。したがって式部は、「武蔵野」歌に王家、中央と結びつくゆかりの紫草と関連があるとの読みをしていたと思われる。

権力の中枢に身を置きながら、いつもその齟齬感にさいなまれていた紫式部にとって、このよ



うな反転する構想にこそ彼女自身の矜持があったと確信する。

## 5. 最後に 紫式部の意図とは

更に筆者はそもそも『源氏物語』自体がなぜ『源氏の物語』なのか？との疑問をも持つのである。紫式部は藤原氏全盛の時代、その中央に居ながら、「藤原氏の物語」ではなく、皇子が源の姓を賜り、源氏となる『源氏物語』を書き上げた。『源氏物語』は王統でありながら、天皇になることが出来ない男の物語である。賜姓源氏が藤原氏との政争のなかでどのように生き延びていくか。紫式部はしたたかである。摂関政治全盛の中心で書かれた物語の主人公は、ことごとく摂関家に打ち勝って、王統の優位性を打ち立てていく。それは光源氏と頭中将との政争であり、また立后問題であったりする。物語の中で中宮に冊立されるのは、藤壺宮、秋好中宮、源氏の娘の明石中宮と全員が王統である。道長が娘達、彰子（一条帝中宮、後一条帝、後朱雀帝母）、妍子（三条帝中宮）、威子（後一条帝中宮）、嬉子（後朱雀帝皇后 後冷泉帝母）をそれぞれ後宮に入れ、一家繁栄を築いている同時代にあってその支配下に居る紫式部は、反対の血統の后を物語の中に登場させていたのである。しかも、その源氏物語の準拠とするところは親政がほどよく施かれた延喜の時代をモデルとしていると言われる。また源氏が摂政となる冷泉帝はその聖代が映されていると言えよう。

権力の中枢近くにありながら、書くことで政道の正しさとは何かを探究していたのか？『紫式部日記』のなかでは、式部は冷酷なまでの自己内面を見つめる目を持ち、同時に他者への深い洞察力を持って語っている。華やかな女房生活に対する批判と嫌悪感、自己を厳しく見つめる姿勢と全体に漂う憂愁感、寂寥感はどこから来るものであろうか。それは一時的な権力の虚しさを見据えた姿でもあるといえよう。

式部は中宮彰子から請われて白楽天の「新楽府」を進講したと、日記で述べている。『源氏物語』には「陵園妾」など引用される個所は多々あるが、概してその詩の内容は体制に批判的なものが多い。諷諭詩は白楽天の得意とした詩の分野であり、混乱した社会を正し、救済しようという抱負を育み制作された。農民の辛苦に同情するもの、諸制度の弊害を告発するものなど、さまざまであった。そのような書物を彰子に進講したことは、中宮にも影響があったのではないか。一条天皇譲位をめぐる道長は彰子と不和になっていった。道長は更に小一条院（敦明親王）を東宮から下ろし、彰子腹の第三皇子（敦良親王）の立太子を望んだ。しかし、『栄華物語』によると、彰子は敦良親王は幼く将来が長いことから第一皇子の敦康親王（中宮定子腹）に譲りたい、と語ったとある。道長は娘の彰子と意見が食い違ったらしい。背後に紫式部の政道を説く教育があっ

たのかもしれない。晩年紫式部は道長に批判的であった小野宮実資と彰子を取り次いでおり（小右記）、それらも道長にとっては紫式部は煙たい存在になったのかもしれない。紫式部は道長により圧力をかけられ追放されたのか？

しかし、式部は最後まで彰子に忠誠を尽くしている。

最後の消息は、彰子病氣平癒を願い、清水寺に参籠した折に、伊勢大輔と歌のやり取りである。

以下（ ）内は『新編国歌大観』私家集番号を示す。

藤式部、清水に篋りたりしに参りあひて院の御料にもろともに御あかし奉りしを見て

しきみの葉に書きおこせたりし

こころざし君にかかぐるともし火の同じ光にあふがうれしさ （86伊勢大輔集 八一）

かへし

世世をふる契もうれし君がためともす光にかげをならべて （八二）

この後一切の記録から姿を消す。門を閉じ出家を果たしたのだろうか？

式部は推定年齢四十五歳でこの世を去っている。最後まで忠誠を尽くした彰子は八十七歳まで生きとおした。孫の後冷泉帝時代、立太子したのはかつての薄幸な三条天皇の女、禎子内親王腹、後の後三条天皇である。

紫式部の一人娘賢子は、成長し後に後冷泉帝の乳母に抜擢されている。位も三位（上達部）を受け大いに宮廷で勢力があったと思われる。天皇の母后と同様乳母は親身になって養育に当たることから、その教育の影響は大きいであろう。紫式部は娘の教育にもかなり力を入れたのではないだろうか。その子が成長して帝の教育係りになっていく。紫式部の正しい政道を求めた姿勢は娘を介して時の帝に多いなる影響を与えたことになる。

名前も定かでない一人の寡婦が、子供を抱えながら執筆した『源氏物語』はいつの世も人々から受け入れられてきたのは、その根底にある客観的に世を見据えた視線にあると言えよう。

歌語「武蔵野」が機能するものは単に確立されたイメージや世界観だけではなく、更に層を深くして読むときより大きな世界を提示してくれることにあった。それはほんのわずかな見過ごすような言葉であるが、作者がどのような思いで書き入れたか、現代の我々はその時代に即して読むことを改めて示していると言える。

## 参考文献

- 1 藤岡忠美他校注 『日本古典文学全集和泉式部日記 紫式部日記 更科日記 讃岐典侍日記』  
小学館、1995年
  - 2 伊藤博校注 『新日本古典文学大系紫式部日記』 岩波書店、1989年
  - 3 阿部秋生他校注 『日本古典文学全集源氏物語』 小学館、1995年
  - 4 柳井滋他校注 『新日本古典文学大系源氏物語』 岩波書店、1993年
  - 5 片桐洋一他校注 『日本古典文学全集竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』 小学館、  
1988年
  - 6 谷口茂他編 『新編国歌大観』 角川書店、1987年
  - 7 永井路子著 『大鏡 古典を読む』 岩波書店、1984年
  - 8 吉原栄徳著 『和歌の歌枕 地名大辞典』 おうふう、1998年
  - 9 中田祝夫他編 『古語大辞典』 小学館、1986年
  - 10 宇野直人著 『漢詩の歴史』 東方書店、2005年
  - 11 堀内公平編 『中国の名詩鑑賞 古楽府』 明治書院、1986年
  - 12 森田悌著 『古代の武蔵』 吉川弘文館、1988年
- 東京（旧武蔵国）の地方史、神話の森、歌語り風土記、に関しては下記のサイトを参照した。
- 13 <http://www.qmss.jp/author/biography/musashi.htm>
  - 14 <http://nire.main.jp/rouman/fudoki/14saitama.htm>